

滋賀埋文ニュース

編集発行：滋賀県埋蔵文化財センター

〒520 - 2122 滋賀県大津市瀬田南大萱町1732 2

TEL 077(548)9681~2

URL : <http://www3.ocn.ne.jp/shiga-mc/>

第334号

2008.1.1

石室の奥に部屋があった!?

高島市 田中(たなか)古墳群



石室の検出状況(右手前が奥室)

これまでの経緯

田中古墳群は、田中神社の北側丘陵一帯の泰山寺野(たいさんじの)台地の東端部に分布する古墳群です。昭和45年の滋賀県教育委員会の分布調査により43基の古墳が確認されています。古墳群のほぼ中央には、直径約58m・高さ約10mの2段築成の帆立貝形を呈する田中王塚古墳が位置しています。その築造時期は、墳丘形態や表面採集された埴輪片などから5世紀後半と考えられています。現在は、周囲の古墳3基とともに、継体天皇の父「彦主人王(ひこうしおう)」の陵墓参考地として宮内庁の管理下にあります。

この他の古墳は、直径約10~15m、高さ約1~3m程度の方墳または円墳で、

時期は、表面採集された須恵器などから6世紀前半とされ、埋葬施設は大半が木棺直葬であろうと考えられてきました。

今回の調査対象は、これらの一群の南端に位置しています。

発掘調査の成果

今回の発掘調査では、以下のような成果がありました。

1. 墳丘

測量を実施した結果、円墳であり、その規模は直径24m、高さ2～4mであることが確認されました。墳丘は、旧地形を利用し、その上に、黄褐色粘質土・灰色粘質土・黒ボク等を、約10～15cmの厚さで交互に盛り土をして整形していました。

2. 埋葬施設

花崗岩質の石材に面取り等の加工を施したものをを用いて構築された横穴式石室でした。天井石・東側壁は石を抜き取られていましたが、羨道部、玄室西側壁、奥壁、奥室は良好に残存しています。石室は、地山を掘り込んで基底石を据え、幅20～90cm・厚さ8～20cmの比較的小型の石材を積み上げて構築しており、また床面には、3～10cm程度の川原石が敷かれていました。

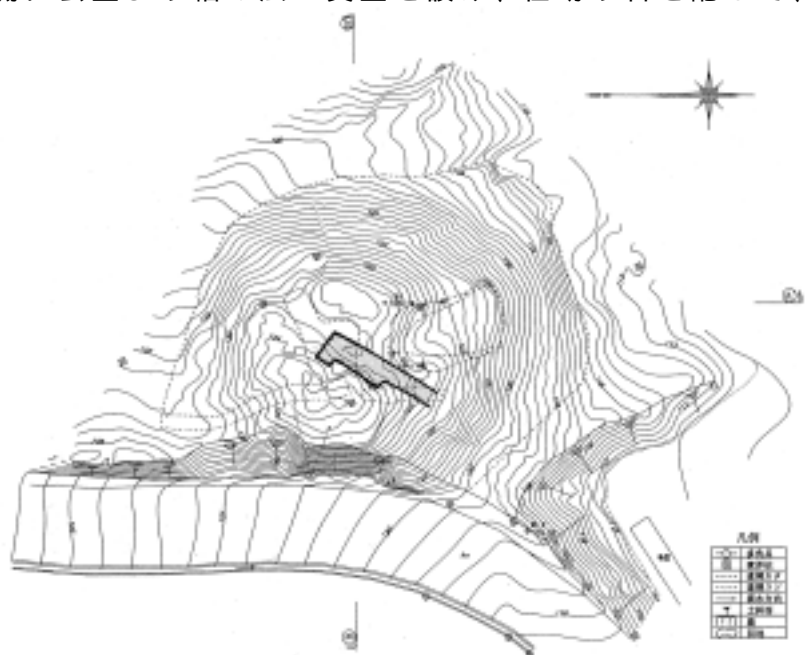
現存部分の規模は、羨道長3.4m・幅1.1m、玄室長3.4m・幅1.9m、奥室長1.1m・幅2.1mで、玄室の奥壁側に玄室より幅の広い奥室を設け、仕切り石を配して、独立した奥室を構築しています。東側壁は、基底石の抜取跡の様子から、奥壁から羨道までほぼ真っ直ぐに作られていたようです。奥室床面は玄室床面より一段高く（高低差約10cm）、床面および壁面には赤色顔料（ベンガラ）が塗布されていました。

3. 出土遺物

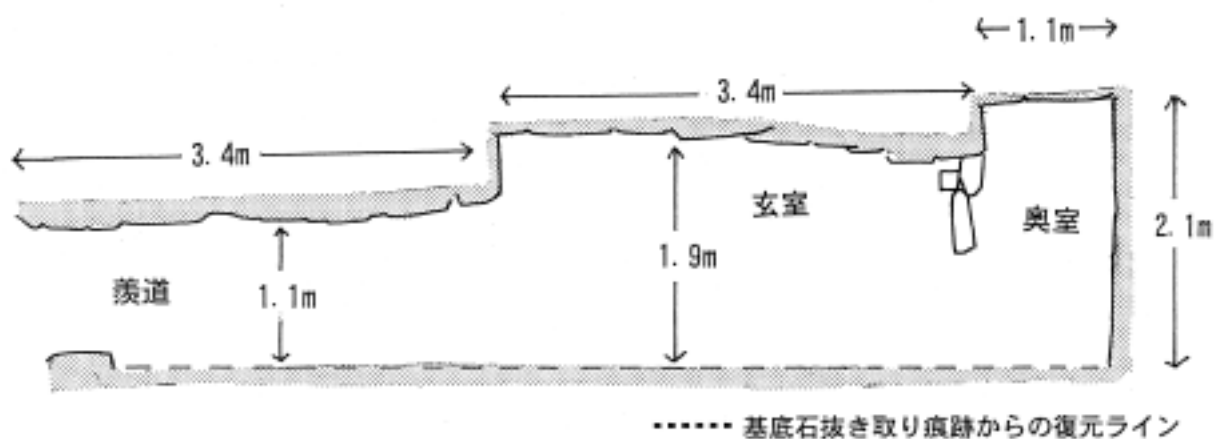
石室内の礫敷きの上、玄室の袖石（そ



田中古墳群 古墳配置図



36号墳の測量図



埋葬施設の規模

でいし) 付近および仕切石付近で多くの遺物が出土しました。袖石付近では、鐘形鏡板付轡、環状鏡板付轡、雲珠(うず)、鉸具(かこ)、辻金具、? 金具(しおでかなぐ)、飾金具などの馬具類が、重なり合うように出土しました。いずれも、鉄地の上に金銅を貼り付けたもので、鋳で留めていました。

仕切石付近では、坏(身・蓋)、無蓋高坏、有蓋高坏、短頸壺、台付直口壺、ハソウなどの須恵器が出土しました。いずれも、6世紀後半のものです。

これらの遺物の他に、玉類(土玉)、鉄鏃、刀子、滑石製紡錘車、耳環、鉄釘なども出土しました。

今回の調査成果の意義

今回の調査成果としては、田中古墳群において初めて埋葬施設の様子が明らかになったことです。しかも確認されたその横穴式石室は、玄室の奥に奥室を設け、その奥壁に沿って、おそらく遺骸を安置したものであると思われるもので、全国的にも類例のないものであることが確認できました。そして、石室内から出土した土器は、6世紀後半の築造時期を指示しており、従来の見解・想定とは異なることを確認できました。今後のさらなる成果に期待しましょう。

[資料提供：高島市教育委員会]

右写真は馬具の出土状況

石室内の様子



鎌倉時代の溝跡を発見

野洲市 中畑古里（なかはたふるさと）遺跡

これまでの経緯

中畑古里遺跡は、妙光寺山から派生する標高 100 m 前後の低丘陵と旧河道によって形成された自然堤防上に位置する、弥生時代から室町時代の集落跡として周知された遺跡です。本遺跡では、平成 4 年度に実施した調査で 6 世紀末から 7 世紀初頭のものと思われる中空円面硯が出土（埋文ニュース 148 号）しており、当時の官人層の居館であった可能性が指摘されています。また平成 16 年度に実施した調査では、古墳時代後期の竪穴住居跡、平安時代の掘立柱建物跡などが検出（埋文ニュース 321 号）され、古墳時代から中世にわたる継続的な開発の実態が明らかになりつつあります。



調査区位置図

今年度の調査成果

今年度は、西出口地区（19-3 調査区）、柿ノ内地区（市道 10 調査区）、堂窪地区（19-2 調査区）の 3 地区で調査を行いました。今回はその中でも西出口地区の調査で見つかった、鎌倉時代の大溝跡について紹介します。

この大溝跡（SD-1）は、13 世紀頃に集落の西側を画する区画溝（推定幅 3.2 m 以上）として開削され、排水路（最大幅約 4.8 m）として、特に近代から昭和初期頃までにおいては洗い場（「カバタ」）として利用されていたようです。

その埋土からは、最下層より 13 世紀頃の土師器皿類や近江型黒色土器？、土師器羽釜、瓦質三足羽釜など、中層から上層では近世～昭和初期頃の土器、陶磁器、砥石、ガラス瓶類、箸や椀などの木製品、洗い場を構築する家屋の廃材などが見つかっています。

なお、この大溝跡に続くものと思われる大溝跡が、堂窪地区の調査でも確認されており、その状況から中畑集落の中心部を囲むように配置されていた可能性が指摘されています。灌漑用水路として集落周辺の湿地からの排水、あるいは生活用水としての利用、さらには集落の防御的な機能をも備えた区画溝として開削されたものと考えられそうです。

〔資料提供：野洲市教育委員会〕



上：鎌倉時代の大溝跡（堂窪地区）

下：見つかったカバタの跡（西出口地区）